

調査研究報告

佐渡島での夏期調査報告（2017 年）※

杉本 浄

Report on the Summer Research Program on Sado Island in 2017

SUGIMOTO Kiyoshi

0. はじめに

2017 年 8 月 12 日から 27 日の間、文学部アジア文明学科を含む複数の大学の学生たちが夏期調査に参加するため新潟県佐渡市に集った。学生が参加する佐渡での調査活動は 2010 年からはじまり、今回は第 8 回目の実施である¹。当初は所属大学の異なる教員 3 名（門田岳久、小西公大、杉本浄）がはじめた「廃校プロジェクト」の調査に学生が加わるかたちで実施された現地調査も、年を重ねるごとにその研究対象が多岐に及ぶようになった²。そのため前年度の 2016 年度より一旦各調査および教育活動を整理しなおし、企画運営を統率する組織として「生活文化フォーラム佐渡」を設立することになった。全体のイメージとしてはこの団体名から、枝葉のように個々のプロジェクトが伸びて、広がっていることになる³。「廃校プロジェクト」もその枝葉の一つとして、主に学生たちが企画・実施する教育活動の実践の場として継続している。

この 2017 年の夏期調査には立教大学、東京学芸大学、慶応大学、東海大学の計 4 大学の学生たちが参加した。さらに、学生たちを支える大学院生も 3 名加わった。前年と同様に学生は調査班と教育班に分かれ、民俗学者の故・宮本常一の残した写真の分析や旧二見小学校で開かれた「夏学校」、子どもたちとかまどで料理を作った「手づからごはん」、東海大学班はこれに加え、二見学園祭の企画や 4 年目の稲鯨祭りの映像化を行った。以上の活動に、アジア文明学科の学生 4 名と調査助手として文明研究科の大学院生 1 名が参加した。

本稿では昨年度行われた夏調査の様相およびその成果発表について東海大学班を中心に報告するとともに、今後の調査の展開についても触れたい。はじめに、調査地の概要を述べ、次に廃校プロジェクトから生活文化フォーラム佐渡へと移行した過程、さらにその間の活動内容について紹介する。続いて、昨年度の調査準備の様相、夏調査の実際、報告書および佐渡市で開かれた成果報告会について触れる。

2004 年に実施された平成の大合併により、それまでの 1 市 7 町 2 村に分かれていた佐渡島の行政区画は統合されて一島一市になった。人口は 2000 年より年平均でおよそ 1000 名の減少が続き、歯止めがかからない状況である。1960 年に 11 万 3296 人あった人口は 60 年あまりで半減したことになる。

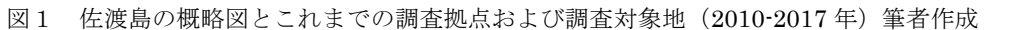




図2 空から見た佐渡（2016 年 9 月 5 日 筆者撮影）

2. 廃校プロジェクトから生活文化フォーラム佐渡へ

2010 年から 14 年までの東海大学班の 5 年間の活動については、杉本（2015）を参照されたい。その後の 2015 年、2016 年の調査活動についてここで手短かにまとめてみたい。この 2 年間は廃校プロジェクトからはじまった現地調査が、様々な要請から多くの研究テーマを同時に進行させていくようになり、それに伴い再編が行われた時期である。また、2015 年 8 月には研究拠点となる「二見ハウス」が稼働した。

2015 年の夏期調査は 8 月 17 日から 31 日まで実施された。アジア文明学科からは 5 名の学生が参加し、前年にはじまった相川地区稲鯨集落におけるお祭り（稲鯨祭り）の映像化プロジェクトを中心に夏学校などにも参加した。首都大 8 名と学芸大 1 名の学生については、廃校と周辺集落の調査を実施し、報告書にまとめた（小西他 2016）。

これとは別に並行して行われたのが、博物館活性化に関する調査であった。大学院生たち（首都大学東京修士課程 5 名、博士課程 1 名、立教大学修士課程 2 名）が、文化庁の採択事業「平成 27 年度文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）佐渡国小木民俗博物館を地域の文化拠点として活性化する事業―博物館活動を通じた地域人材育成事業―」の下で調査を行った。なお、これに立教大 2 名、首都大 1 名の学部学生が文献整理のために資料班に加わった。

夏調査後、東海大班は 9 月より翌年 2 月まで、2 年にわたって撮りためた映像を編集した。この映像は 2016 年 2 月 6 日に佐渡市地域振興課の招きで、学生 3 名が地元の稲鯨集落で披露し、さらに翌日には「学生たちにとっての佐渡・稲鯨地区の事例から-」と題したシンポジウムで広く市民にも公開された（この時、首都大学東京の学生 2 名も招かれ、2014 年度の報告書の内容を発表した）（図 3、4）。最終的に祭りのドキュメンタリー映像は、この時、現地で指

摘された修正箇所を反映させて改訂され、DVD 化した後に佐渡市の各図書館に寄贈された。なお、映像の発表に関しては NPO 法人佐渡芸能伝承機構の全面的な協力の下で実施され、編集では広報メディア学科の五嶋正治教授にお手伝いいただいた。



左 図3 稲鯨集落での報告会（稲鯨漁業センター、2016年2月6日 門田岳久撮影）



右 図4 シンポジウム準備模様（佐渡市中央会館 2016年2月7日 筆者撮影）

2016年の夏期調査は8月15日から30日の間に実施された。東海大班は院生1名、学部生5名で構成され、二見夏学校、国際芸術祭アースセレブレーションの子供向けワークショップ、稲鯨祭り映像化プロジェクト、民俗学者・宮本常一写真のプロジェクトに参加した。なお、この年から「廃校プロジェクト」を改め「生活文化フォーラム佐渡」の名称の下で企画・運営を行うことになった。

新たな宮本写真プロジェクトは「観光」をテーマとし、東海大1名を含め立教大、首都大、千葉大、津田塾大から9名の学生が参加し、3班に分かれて聞き取り調査をした。詳細は後述する「3. 調査準備と内容、およびスケジュールの決定まで」と「6. 宮本常一写真プロジェクト」を参照されたい。アジア文明学科の学生1名は両津・真野班に加わり、真野御陵の観光化とその変遷について検討する論考を提出した（門田 他編 2017）。

かつての暮らしの中の素材を見直す竹プロジェクトは東海大独自のものとして実施した。教育活動を含めたこれらすべての活動は、第331回知のコスモス展示会「夏の竹取物語～佐渡調査実習報告2016～」(開催日：2016年10月25日から11月11日)において、さらに内容を再構成して東海大学前駅南口の東海大学サテライトオフィス(2017年1月23日から27日)で公開された。

教員も加わった宮本写真プロジェクトの成果は学生の調査も含めて門田・小西・杉本他編(2017)にまとめられ、さらに佐渡博物館・特別写真展『宮本常一写真で読む佐渡』展(開催日：2017年4月1日から6月20日)、その後一部内容を補充して佐渡國小木民俗博物館(同年7月1日から31日)に巡回した。また、国際芸術祭アースセレブレーションでは教員3名による町歩きを含めたセミナー「宮本常一写真で歩く宿根木」(8月20日)を行った。

3. 調査準備と内容、およびスケジュールの決定まで

次に 2017 年の夏期調査について触れたい。本格的な準備は 4 月 29 日から 5 月 2 日に行われた予備調査にはじまった。この期間中に今夏のスケジュールを各協力者および協力機関に伝え、個別に会議を持って、それぞれの活動内容を決定していった。さらに、生活拠点になる集落センターと旧小学校は二見集落の管理となっているため、この年新たに就任した区長に挨拶にうかがった。区長を経由して、センターと学校の使用について集落の委員会で審議してもらえよう交渉した⁴。こうした事前準備に加え、昨年よりはじめた民俗学者の宮本常一が残した写真を利用した写真プロジェクトの第 1 回目の展示が佐渡博物館で行われていたため、現地で新聞社 2 社とケーブルテレビ 1 社の取材に対応した。

宮本写真プロジェクトについて、ここで若干補足しておきたい。民俗学者の宮本常一は生涯に 10 万点余りの写真を残し、うち 4000 点近くが 1950 年代終わりから 1970 年代終わりまでの佐渡を被写体としている。これらの写真を厳選し、それが撮られたであろう場所を学生たちが突き止めることからフィールド調査がはじまる。学生たちは地元住民に対して、その場所のありかを聞くことで、まず不慣れな聞き取り調査のきっかけをつかむのである。次に写真を提示することで思い起こされる人々の記憶を収集する。最終的にはこれらの記憶の断片を学生たちが分析していくことで、佐渡の過去、現在、未来に関して考察していくのである。

宮本写真プロジェクトは出身地の山口県周防大島にある周防大島文化交流センター（現、宮本常一記念館）の協力の下で、5 年ほどの調査期間を設定し、毎年テーマを設けて現地調査を行い、その年の研究成果を報告書と展示によって公開する。2 年目にあたる本年のテーマは昨年に引き続き「観光」であった。写真班に関しては、7 月 29 日に参加する学生全員が立教大学池袋キャンパスに集まり、勉強会と班分けを行ってから現地入りした（図 5）。

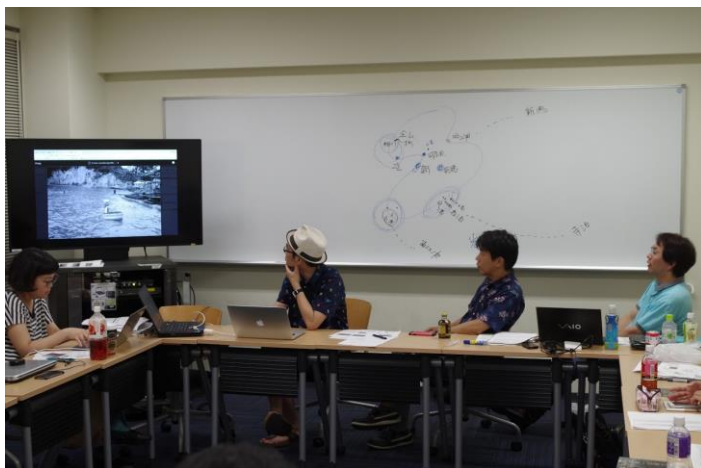


図 5 写真班の事前打ち合わせ（立教大学、7 月 29 日 藤井秀平撮影）

7 月末までにはすべての準備作業はほぼ終了し、事務作業の多くを調査助手の大学院生 2 名が担ってくれた。表 1 にあるように、教育班と調査班の参加学生数はそれぞれ 11 名になった。全日程に参加する調査班の学生も 2 名いた。学生たちは二見集落センターで共同生活をし、そこを拠点にそれぞれの活動を行った。二見滞在中に学生たちは各家にもらい湯に行き、地元の人たちとの交流を深めることになった。

表 1 2017 年度夏期調査参加学生数

他、大学院生 3 名、教員 3 名

	東海大	立教大	慶応大	東京学芸大	計
教育	3	0	0	8	11
調査	1	4	3	3	11

最終的に決まった主要なスケジュールは以下の表 2 にある通りである。

表 2 2017 年度夏期調査スケジュール

	月日	8/13	8/14	8/15	8/16	8/17
	曜日	日	月	火	水	木
全体の流れ	教育班	学生11:50着 埠頭集合 ミーティング 夏学校準備 (掃除など)	夏学校 【9:30-12:00】		休息日	宿根木 に移動
		二見学園祭準備		二見学園祭 【16:00- 20:00】		
	写真班					学生11:50着 両津埠頭集合 ／ミーティング
	教員	調査指導および各自の調査				

8/18	8/19	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26	8/27	8/28
金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
ECふるさと学習 事前準備	ECふるさと学習 小木民俗博物館 【両日9:30-12:30】 (学芸大のみ)		各自 解散							教員/院生 後片付け後 帰宅
アース・セレブレーション(EC)							稲鯨祭り 映像化 (東海大のみ)			
学生各自 の調査地 で下見	赤泊・相川・小木班、各地で調査						集落センター集合 最後ミーティング + 打ち上げ会	学生 片付 16:05 フェリー 帰宅		
ECセミナー 「宮本常一 写真で歩く 宿根本」 【10:00- 12:00】			調査指導および各自の調査							

4. 二見夏学校と学園祭

今回で8回目となる夏学校では、東京学芸大学院生の齋藤真智子さんをコーディネーターに子供たちの「特別な場所」に目を向けるワークショップを行った（図6）。目の前に広がる海、普段過ごす部屋、家から見える景色、よく遊ぶ場所など、自分にとっての特別な場所を写真で撮り、文章で解説を加えて、最終日の夕方から開催された学園祭で披露した。



図6 二見夏学校の様子（8月15日 筆者撮影）

学園祭は地元青年団の要請で3年ぶりに行われた(図7)。開催にあたっては公民館や子供会による協力があった。企画には東海大の学生が参加しており、祭りでふるまわれる野菜の収穫に過去夏期調査に参加したことのある卒業生たちも加わった。体育館では夏学校で作った灯明と自分にとっての特別な場所を紹介するボード、さらに自身で紹介した映像が流れた。廊下には夏学校の8年を振り返る写真展を開催した。

屋外では子供たちのスイカ割にはじまり、太鼓やバンド演奏、盆踊り大会と盛りだくさんで、最後は夏らしく子供たちが花火をやって終了した。この企画は昨年の夏に青年団の方から依頼があり、1年をかけて準備してきたものである。8年も調査拠点として二見でお世話になってきたが、青年団との共同企画は今回がはじめてであった。その意味で大変貴重な機会になった。



図7 二見学園祭(8月15日 筆者撮影)

5. 国際芸術祭アースセレブレーションでの企画

アースセレブレーションこと EC は 2017 年で 30 年目を迎える国際芸術祭である。当初は太鼓をたたいて世界を回る鼓童が各地で出会った演奏家たちを招いて、地元の自治体と協力しながら開催してきた。現在は佐渡市の全面的な協力の下で実行委員会を設けて、佐渡の新しいお祭りにしようと毎年様々な企画を試みている。

この EC の子供向けワークショップとして「佐渡ふるさと学習～手ずからごはん～」を地元の宿根木の人たちと東京学芸大学院生の齋藤真智子さんを中心に学生たちが企画・運営した。その内容は子供たちが博物館の庭先で、かまどを使った地元の料理に挑戦するものだった。EC 期間中の2日間(8月19日と20日)に2回のワークショップを開いた(図8)。また、20日に同博物館を使って、教員3名による EC セミナー「宮本常一写真で歩く宿根木」を開催した。

参加者 20 名とともに博物館で開催されていた宮本常一写真で読む佐渡の写真展を見学し、さらに宮本写真をもとに重要伝統的建造物群保存地区の宿根木を歩いた（図 9）。



図 8 佐渡ふるさと学習～手ずからごはん～の様子（8 月 20 日 撮影者不明）



図 9 EC セミナーの様子（8 月 20 日 門田岳久撮影）

6. 宮本常一写真プロジェクト

宮本常一の写真を使った 2 年目の調査プロジェクトは、2016 年度と同様に「観光」をテーマに、11 名が相川、赤泊、小木・宿根木の 3 班に分かれて現地調査を行った。東海大からは 2 年生 1 名が赤泊班に参加した。

調査方法は宮本の写真をもとに、現地の人びとの語りを導き出し、分析していくやり方をとっている。そのため宮本の写真を直接読み込み、その意図を明らかにすることを主眼としてい

ない。学生は写真をもってひたすら人に聞いて回るのである。港町の赤泊をフィールドとして選んだアジア文明学科の学生は、街のシンボルとなっている私邸にある「望楼」の写真にまず関心を持ち、元の家主を調べた。今日の赤泊港の礎を築いた田辺九郎平（1831-1902 年）は 19 歳で北海道に渡りニシン漁に資金を投じて財をなし、さらに金融業で成功を収めた人物である。50 歳の時、赤泊と北海道との交易のため、私財を投じて赤泊港の改良に着手した。

この学生が調査後にまとめた報告書の第 6 章では「赤泊の町並みの形成と人々の記憶」と題し、港町として独自に発展した町屋に注目し、赤泊の町中を写した宮本写真によって引き出された人びとの記憶から、かつての賑わいから静けさへの町の変貌ぶりを浮かび上がらせた。さらに、現在の町並み保存を推進し、ガイドとして活動している人たちにも注目する中で、決してそうした静けさを「衰退」として悲愴な気持ちを持って人びとが生活しているのではないことを強調している（小西他編 2017）。



図 10 赤泊班の調査の様子（8 月 21 日 吉沢美沙撮影）

赤泊は他の調査地域である相川と小木・宿根木地区と比較して、観光地として注目を集めてきた場所ではない。それぞれの地区での細かい調査報告はここでは割愛したいが、学生たちが調査した他の 2 つの地区の特徴だけを見ていこう。

相川班は、江戸時代はじめに開発が本格化し、何度か衰退期と繁栄期を経て 1989 年に閉鉱した金銀山の町を写し取った宮本の写真を持って歩いた。最も金が産出されたのは戦後の 1950 年のことで、佐渡島の人口も 12 万 5,597 人と最大で、相川地区の街場は金銀山関係の人びとでにぎわい、住む土地に困るほどであったといわれる。鉱山が衰退すると同時に、その代替りの産業として力を注いだのが観光業だった。かつて金銀山関係の人びとでにぎわった旅館や料亭は観光客向けに切り替えがなされた。現在、三菱マテリアルが経営する観光施設、ゴールデン佐渡の整備と拡充が進んだのはちょうどこの頃だった。さらに、マスツーリズムが広がる中で、大勢の観光客を受け入れるために、街の外に次々と大型ホテルが建設された。宮本の写真

はこの変化の瞬間を写し出している。1990 年代初めより観光業も衰退期に入り、ホテルの倒産が相次いだ。佐渡金山の世界遺産登録運動に起死回生を図るも、以前の賑わいは取り戻せずにいる。

宮本が最も頻繁に通ったのが小木と隣接する宿根木だった。小木は江戸時代にあたる 17 世紀に金銀山の積出港として、さらに 17 世紀終わりに北前船の寄港地になることで発展した。そこから西に 4 キロほど西に行ったところにある宿根木は、小木に寄る廻船の修理だけでなく新造船を作る船大工などの職人が居住していた集落だった。中には千石船の船主として富を築いた者もいた。明治末に和船を使った海運が衰退すると、小木および宿根木からはかつての活気は失われていった。1970 年代に離島ブームもあって観光業が力をつけ、ホテルの大型化や民宿が盛んとなったが、1990 年代初めを境に観光客は減少していった。古い建造物が残る宿根木では、宮本常一の指導のもとで、1972 年に閉校になった小学校の校舎を再利用して、民俗博物館が開館した。その後、旧小木町の後押しで集落を重要伝統的建物群保存地区に登録するための努力がなされ、1991 年に選定を受けた。現在、宿根木は佐渡の重要な観光地の一つとなり、小さな集落に大勢の観光客が訪れている。

以上の写真プロジェクトの成果は門田岳久・小西公大・杉本浄・鍋倉咲希（2018）にまとめられ、さらに 2017 年に引き続き、佐渡博物館・特別写真展『宮本常一写真で読む佐渡②観光以降』展（開催日：2018 年 3 月 19 日から 5 月 31 日）の開催に繋がった。その後この写真展は一部内容を補充しながら、佐渡國小木民俗博物館（同年 7 月 1 日から 8 月 31 日）に巡回した。また、2018 年 2 月 4 日に先述した教育班とともに佐渡市地域振興課の主催する「平成 29 年度大学等と連携した地域活性化実証事業合同報告会」に招待され、学生たちを中心に活動と成果を発表した（図 11）⁵。

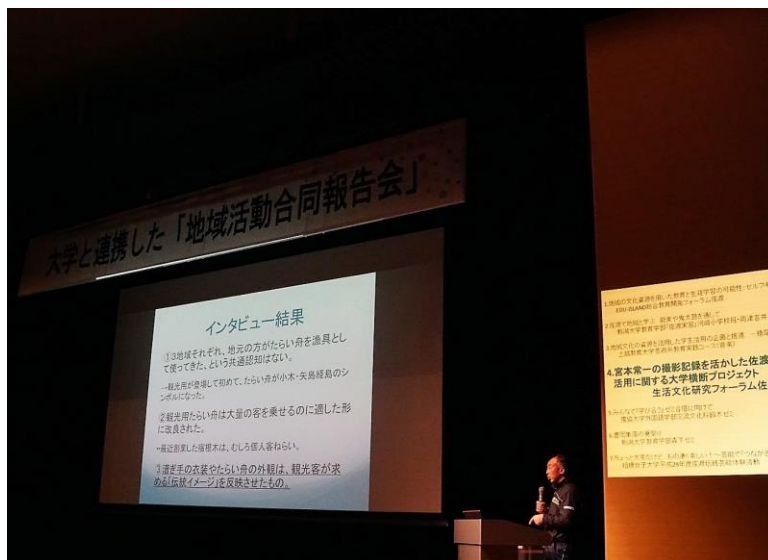


図 11 合同報告会の様子（あいばーと佐渡、2018 年 2 月 4 日 筆者撮影）

7. 稲鯨祭り映像化プロジェクトの継続

その他の活動としては、2014 年より着手したお祭りの映像化がある。東海大班は相川地区の七浦海岸に位置する稲鯨集落で毎年 8 月 25 日に催される祭りに焦点を当てた映像を撮りためてきた。稲鯨は長らく漁業を生業とする人びとが生活していたが、今日では職業の多様化が進んでいる。先述したように 2015 年においてもインタビューを中心に映像を撮りため、秋と冬に 2 年分の映像を編集し、翌 2016 年 2 月に佐渡市で「稲鯨祭り」の映像を披露した。引き続き、10 年計画でお祭りの映像を撮りためるプロジェクトを継続している。この中で、集落の人びとの祭りへの思い、祭りの担い手が減少する中での工夫、祭り支度の変化などを焦点に、いくつかドキュメンタリーとして披露できるよう、今後も祭りに通う予定である。



図 12 稲鯨祭りの参与調査（8 月 25 日 吉沢美沙撮影）

8. おわりに

以上、2017 年度の夏期調査を中心に佐渡島でのフィールドワークや教育活動について報告してきた。はじめて夏学校に参加した学科学生からは「夏学校を通して「関わる」ことの大切さを知りました。子供や地域の方々に自分から積極的に関わることで、ワークショップ自体がより良いものになった」や「黙々と作業に打ち込んでいる子供たちの様子を見守る自分は、まるで先生になったようでした」という感想があった。これまで教育班に関しては、教員を目指す学生を主に誘ってきた経緯がある。調査・研究を主軸とする写真班に参加した学生は「班員 4 人でその日の内容をまとめ、意見を交換しました。その際、自分たちが得た情報の共有がいかに重要かに気づきました。また、調査の事だけでなく、多方面の分野の話を年齢も大学も違う 4 人が集まり話し合えると言う事は、なかなかない機会です、こちらも良い経験になりました」と述べている。調査班に関しては、他大学の異なる分野を学ぶ学生たちの交流の場としての意

図がかねてよりあった。このような実践的な野外活動の成果が個々の学生にどう影響を与えるのかは、慎重に見守らなければならないところではあるが、学生たちはそれぞれに何かしら得るものがあったようである。

先述したように 8 年目にもなると、研究範囲や教育内容も多岐に及び、参加学生も多数になる。そのため 3 名の教員では指導が行き届かず、ティーチング・アシスタントやフィールド・アシスタントが必要となる。大学院生にその役を引き受けてもらっているが、学部生の現地サポートだけでなく、全体をどう動かしていくのか、行き詰った学部生をどう指導するのか、さらに報告書をどう書いていかなどを直に学ぶことのできる、院生たちの教育の場にもなってきた。また、卒業論文のテーマとして、多くはないもののその後も調査を継続する学生も毎年出てきている。

「生活文化フォーラム佐渡」はそうした佐渡をフィールドに学びたい人たちの接点を提供する場として、今後とも継続していければと考えている。

【主要参考文献一覧】

門田岳久・小西公大・杉本浄・佐藤航也・石野隆美（2017）『宮本常一写真で読む佐渡—①マストーリズム』生活文化研究フォーラム佐渡。

門田岳久・小西公大・杉本浄・鍋倉咲希（2018）『宮本常一写真で読む佐渡—②観光以降』生活文化研究フォーラム佐渡。

門田岳久・小西公大（2018）「フォト・エリシテーションを用いた教育と社会実践：宮本常一写真を通じた佐渡の開発/観光史研究から」『立教大学観光学部紀要』、No.20, pp. 40-53.

小西公大・吉村竜・岡田愛編（2016）『ローカリティが生み出されるとき—佐渡島および東京都内の廃校再利用に関する調査報告』首都大学東京社会人類学分野。

杉本浄（2015）「廃校プロジェクト佐渡夏期調査の 5 年間 - 東海大学版の活動を中心に -」『東海大学紀要文学部』、第 103 号、pp.69-81.

註

※ 本稿は 2017 年 10 月 23 日から 11 月 10 日にかけて開催された、第 346 回東海大学文学部 知のコスモス展示会「炉辺夜話—佐渡調査実習報告 2017—」の内容を発展させたものである。調査の実施にあたっては、東海大学学部等研究助成金の援助を得た。学生の滞在および 2018 年 2 月の報告会に関しては佐渡市の地域振興課が運営する「大学等と連携した地域活性化実証事業」から支援を得た。

1 ただし、アジア文明学科の学生たちが参加したのは翌年の 2011 年からである。

2 門田は現在、立教大学観光学部、小西は東京学芸大学教育学部に属する。

3 現在の「生活文化フォーラム佐渡」の活動については、以下の URL のホームページを参照されたい。
<https://sites.google.com/view/forum-sado/>

4 現在、二見集落センターは市から集落に譲渡され、旧二見小学校は集落により管理が任されているため、その使用にあたっては区長 1 人の許可ではなく、集落の委員会における合意が必要である。

5 なお、写真プロジェクトの教育効果については、門田・小西（2018）を参照されたい。